

# 大原御幸の道

鈴井千晶

## 〔抄録〕

『平家物語』灌頂卷「大原御幸」で、後白河法皇はかつて高倉院の皇后であつた建礼門院が閑居する寂光院を訪れた。しかし、鎌倉への配慮で公の御幸としなかつたために、その御幸に関する詳細な記録は確認出来ない。覚一本『平家物語』では、補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡を観覧された後に寂光院へ至つたとあるが、どのような道筋を辿つたのであろうか。従来のテキストの注釈を

再検討し、更には考古学的な新しい発見を視野に入れ、「大原御幸」で後白河法皇が通つた道の考察を試みる。

キーワード…補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡、平家物語、灌頂卷、

大原御幸

## 一

覚一本『平家物語』の「大原御幸」に拠ると、文治二（一一八六）年四月下旬に後白河法皇は建礼門院の閑居の地大原へと御幸された。鞍馬街道經由で、補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡を観覧され、寂光院<sup>〔1〕</sup>に至つたとされる。鞍馬街道とは葵橋から北行し、深泥池、鞍馬谷を経て丹波に至る街道である。次に「大原御幸」の本文の一部を示す（新日本古典文学大系に拠る）。

鞍馬とほりの御幸なれば、彼清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の旧跡を観覧あつて、それより御輿にめされけり。遠山にかかる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるる。比は卯月廿日余の事なれば、夏草のしげみが未を分けいらせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覧じなれたるかたもなし。人跡たえたる程も、おぼしめし知られて哀れなり。西の山のふもとに、一字の御堂あり。即ち寂光院是なり

御幸の際に立ち寄つたとされる補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡の位

置について近年付された注釈を確認すると、付注者によって異なった位置に推定されていることに気付く。例えば近時、一九九四年に出版された新日本古典文学全集の市古貞次氏の注を見ると、補陀落寺は「山城国愛宕郡(京都市左京区) 大原の西、静原との間」、小野皇太后宮の旧跡については「左京区静市市原町」とされている。<sup>(2)</sup>地図で確認すると、この二つの位置とされている地区はかなり広範囲にわたり、それらの正確な位置を読み取ることは難しいように見受けられるが、その二つの位置を特定することは出来ないであろうか。史実であるといわれながらも、不明な点の多い「大原御幸」を再度今までの注釈を溯る形で考え、補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡の位置を再検討し、後白河法皇がどのような道筋を辿って建礼門院を訪れたのかを捉え直してみたい。

補陀落寺は清原深養父の山莊を改めて寺としたものである。この寺は中世には廃絶となったため、長く寺跡が分からなかった。江戸期に著された地誌類を見ると、例えば『雍州府志』四には、「在鞍馬與大原之間<sup>上</sup>。清原深養父所建立之補陀落寺、在此所<sup>一</sup>。今堂絶礎石所々殘」と鞍馬と大原の間にあり、廃絶後は所々礎石が残っているとされる。また『山州名跡志』卷之六には、「舊地靜原北端ヨリ。五町許寅ノ方ニ當ル山間也。谷ヲ左ニ入ルコト二町許。土人此所ヲ云ニ堂谷……是其堂跡也。大ナル岩アツテ、景色ヲナス。其地傍ニ古タル石塔婆一重アリ」と、静原の北端より約五町東北の山間の、堂谷という谷を左へ約二町ほど入った所で、そこに大きな岩の傍に石塔婆があるとしている。『山城名勝志』卷十二は、「舊跡在江文明神與靜原

之間。所々存礎石。或云、去靜原民村半里許山麓有古榿株。是補陀洛寺舊跡也」とし、江文神社と静原との間には所々礎石があり、民村から約半里ほどの山麓に古榿の株のある所だとされる。『山城名跡巡行志』第三には、「在同村東山中。村ノ北ノ端ヨリ五町計東方ニ當ル山間也。谷ヲ左へ入コト二町計也。字云堂谷……礎石尙存。大岩アツテ景色ヨロシ傍ニ石塔一重アリ」と、『山州名跡志』とはほぼ同内容である。いずれにせよ補陀落寺跡は、静原にあつて礎石や石塔婆が残っているとされる。既に江戸期には具体的な寺跡は分からず、村民の言い伝えでのみ大体の位置を知ることが出来るという状況であつたらしい。現在、「小町寺」と呼ばれる「補陀洛寺」は天台宗鞍馬寺の末寺で市原町に存するが(以下、便宜上現在の「補陀洛寺」を通称の「小町寺」と表記する)、『京城勝覽』の「市原」の箇所には、「村の入口右の方に補陀落寺あり。むかしの普陀落寺にはあらず」とあるように、元の位置とは全く異なっている。『雍州府志』四に拠ると、「當時稱市原之堂誤爲補陀落寺」と、当時「市原之堂」と称していたものを誤つて「補陀洛寺」と為したとする。また、この続きに、「今在小野市原」とされ、これらの記事から江戸前期には現在認知されている「小町寺」が市原町に存在したことが窺える。

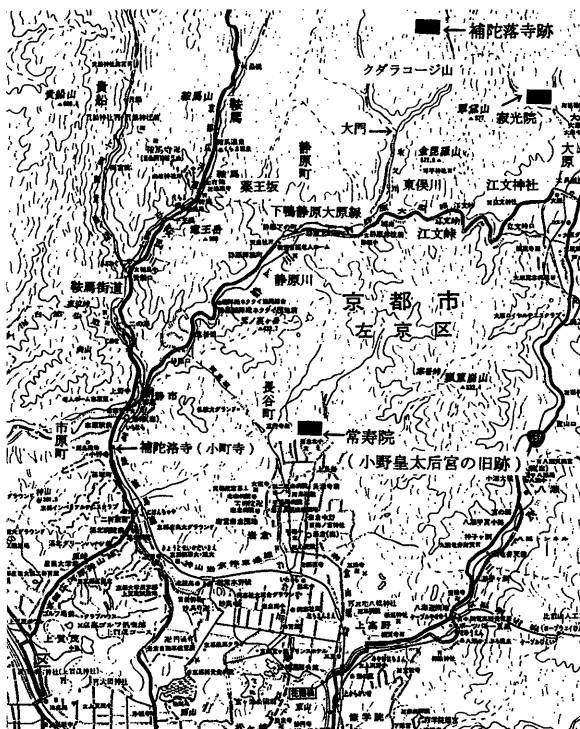
『平家物語』(覚一本系)の補陀落寺について、出版年の新しい順から注釈をしてみる。

・左京区静市静原町：佐伯真一氏・三弥井書店・二〇〇〇年  
・大原の西、静原との間：市古貞次氏・小学館(新日本古典文学全集)・一九九四年

- ・大原の江文：杉本圭三郎氏・講談社学術文庫・一九九一年
  - ・静原と江文峠との間：梶原正昭氏・小学館・一九八二年
  - ・大原の西、静原との間：市古貞次氏・小学館（日本古典文学全集）・一九八〇年
  - ・左京区静原：富倉徳次郎氏・角川書店（鑑賞日本古典文学）・一九八〇年
  - ・左京区静原の山中：弓削繁氏・加藤中道館・一九七四年
  - ・左京区静原町堂ヶ谷：高橋貞一氏・講談社文庫・一九七二年
  - ・江文峠の麓：佐々木八郎氏・『平家物語評講』明治書院・一九六三年
  - ・左京区静原の山中：高木市之助氏他・岩波書店（日本古典文学大系）・一九六〇年
  - ・大原村江文：高木市之助氏他・角川書店（日本古典鑑賞講座）・一九五七年
  - ・静市野村市原：富倉徳次郎氏・朝日新聞社・一九四八年
  - ・静原と江文峠との間：御橋惠言氏・『平家物語略解』芸林舎・一九二九年
  - ・大原村付近：今泉定介氏・『平家物語講義』弘文社・一九〇一年
- これらは場所によって、大きく四つに分類することが出来る。第一の形式は静原（以下①とする）、第二の形式は江文（大原）と静原の間（以下②）、第三の形式は江文（大原）（以下③）、第四の形式は市原（以下④）とする。①の静原は、『京羽二重』第一、『出来齋京土産』卷之五、『洛陽名所集』卷之七などに見られるように、昔「賤原」と

いったが、「宿しめてなに山かつのしつ原や静なるへきあたに住居を」という和歌に因んで「静原」といわれるようになった。『角川日本地名大辞典』26京都府 上巻<sup>③</sup>に拠れば、「鞍馬と大原の中間山地にあり、静原川上流部流域に位置する。西は葉王坂を越えて鞍馬に、東は江文峠を越えて大原に至る」とされ、地名は白鳳の初年よりと伝えられ、山城国愛宕郡のうちである。③の江文峠は、大原地区の西方にある。金毘羅山の南に位置し、静市地区と大原地区を結んでおり、峠より少し東に江文神社が位置する。④の市原町には、「小町寺」という寺名からも分かる通り小野小町の墓があることで知られている。『出来齋京土産』卷之五に拠ると、「深草の四位少將に思ひかけられ其心ざしをとげざりければ小町に物の怪つきて關寺邊にまどひ行てあらぬすがたになり。つゐに此所に來りて死たりしかば市原野邊の墳の主となせりといふ」と、古くから小野小町没地の伝承があったようである。前掲辞典には「鞍馬川・静原川の合流点よりやや南に下ったところに開ける山間の平野。鞍馬街道が北上」しているとある。山城国愛宕郡のうちで、古代・中世は「市原野」という呼び方が主であった。なお、「静市地区」とは静原町・市原町一帯の地域をいう。次頁に京都市左京区の地図を示す。<sup>④</sup>

①の注釈は、『山州名跡志』や『山城名跡巡行志』を典拠としていえると思われる。高橋氏の注釈の「堂ヶ谷」という地名は、辞典では確認することが出来ず、静原の地元の人には口承として伝わっているが、現在正確な位置は分からなくなっている。②の注釈は『山城名勝志』などを典拠としていえると思われる。③の注釈については出典が定かで



図一 補陀落寺跡、小野皇太后の旧跡地

はないが、江文神社と静原地区との間に江文峠があり、これも『山城名勝志』巻十二の、「舊跡在下江文明神與・静原・間」という記述に拠って、地域を限定して書かれたものと考えられる。④の注釈は富倉氏（一九四八年出版）のみである。「市原」とは現在の「小町寺」の位置する場所であり、後白河法皇が観覧したという元の補陀落寺の場所ではない。後に氏は、一九八〇年に角川書店から出版された鑑賞日本古典文学『平家物語』の注釈で、「静原」と書き直されている。①、②の形式による注釈は妥当であったといえる。③の形式による注釈は、少々ズレがあるように思われる。おそらく、補陀落寺跡は下鴨静原大

原線沿いに存したと考えられたためではなからうか。実際は江文まで行かず、東俣川を北上しなければならない。④の形式の注釈は、先ほど述べたように、現在の「小町寺」の位置である。

近代の『平家物語』の注釈は以上のようなものであるが、ここに注意すべき論文がある。梶川敏夫氏によって書かれた「京都静原補陀落寺跡——平安時代創建の山岳寺院跡——」（一九九〇年三月・古代文化四二）である。

一九八八年に補陀落寺と思われる遺跡が発見された。梶川氏は、「静原の集落の北々東約三kmにある通称『クダラコージ山』と呼ばれる静原町の山中で、近年確認された」遺跡が補陀落寺跡であると指摘される。補陀落寺跡へは、「静原の集落の東はずれにある静原小学校前のT字路を北へとり、静原川が東俣川と江文川と分岐する地点を、北方（東俣川側）へ川沿の道を約1km進むと西俣川と東俣川の分岐点に達する……ここから川の浅瀬を東へ渡り、東俣川の左岸を川に沿って更に五〇〇m程進むと、左手川向こうの木立ちの間に小屋が見える所に出る。ここには、谷川に丸太を架けただけの橋があるのですぐ分る。普通車程度であればここまでは進入可能であるが、ここから寺跡へは徒歩でないと進めない。谷川の瀬を西へ渡って小屋背後の谷筋（地元ではこの谷をクダラコージ谷と呼称している）に沿って北西へ一五〜二〇分程登ると寺跡に達する」といわれる。静原の地元では、補陀落寺に由来すると思われる「クダラコージ山」、「大門」（補陀落寺の南門があったと思われる）などの地名が残っていること、また伝承などから、当該遺跡が補陀落寺跡であると知られていたようである



図二 大門付近

(図二参照)。

補陀落寺の立地は急な南向き斜面で、険しい山道であったことが窺える。後白河法皇がわざわざ補陀落寺の観覧を目的とされた理由については、康治二(一一四三)年に、後白河法皇の伯父にあたる覚実が別当に補されていたため、また本尊の千手観音は靈驗あらたかなことで知られていたためと、角田文衛氏が興味深い見解を示されている。<sup>(5)</sup>

一九八八年に補陀落寺の遺跡が発見され、梶川氏による補陀落寺の遺跡発見の論文は一九九〇年に発表されている。また、『平安時代史事典』にも補陀落寺跡に関する記述がある。<sup>(6)</sup>にもかかわらず、当然留意すべき『平安時代史事典』の出版年の一九九四年以後の注釈に、この事項が取り上げられていないことは誠に遺憾であるといえよう。

## 二

小野皇太后宮とは、後冷泉天皇の後宮で、藤原歆子のことである。『平安時代史事典』に拠ると、母は藤原公任女で永承二(一一〇四)年入内し、翌三年女御の宣旨を被った。四年に皇子を出産したが夭折したため、里邸の二条・東洞院邸に引きこもりがちであったが、六年ごろから異母兄、長谷の法印静円の住む小野に籠居し、同年准三宮となった。治暦四(一一六八)年皇后になる。承保元(一一七四)年六月皇太后となるが、八月には出家し、引き続き小野に住み小野皇太后宮と称された。深く仏教に帰依し、小野亭を常寿院と改め念仏三昧の余生を送った。常寿院は白河天皇の御願寺となるとともに、法勝寺の

末寺となったとしている。

次に常寿院となった小野皇太后宮の旧跡についての注釈を確認したい。

・左京区岩倉長谷：佐伯氏・三弥井書店・二〇〇〇年

・左京区静海市原町：市古氏・小学館（新日本古典文学全集）・一九九四年

・左京区静海市原町：梶原氏・岩波書店（新日本古典文学大系）・一九九三年

・小野山付近か：富倉氏・角川書店（鑑賞日本古典文学）・一九八〇年

・北区小野：弓削氏・加藤中道館・一九七四年

・北区小野、左京区静原市原町、江文山の麓など：佐々木氏・明治書院・一九六三年

・北区小野：高木氏・岩波書店（日本古典文学大系）・一九六〇年

・左京区静海市原町：富倉氏・朝日新聞社・一九四八年

・小野山付近か：山田氏・宝文館出版・一九三三年

・左京区静海市原町：御橋氏・『平家物語略解』芸林舎・一九二九年

・小野山付近か：今泉氏・『平家物語講義』弘文社・一九〇一年

ここでも先と同様に、次の四つの形式に分けて考察したい。第一の注釈の形式は左京区岩倉長谷（以下①とする）、第二は左京区静海市原町（以下②）、第三は北区小野（以下③）、第四は小野山（以下④）としている。また佐々木氏はいくつかの説を挙げたうえで、江文峠の麓に見立てられている。

更に大きく分けると、左京区と北区とで付注者の説が分かれている。

①、②、④（小野山は大原山ともいわれ、比叡山の北部である。京都市左京区大原地区と滋賀県大津市御木町にまたがる）は左京区、③は北区の小野を示している。

なぜ、このようにいくつかの説が出るのか。また、歎子が籠居したという「小野」とはどこなのか。「小野」という地名は、『山城名跡巡行志』第三に「當國二小野三所アリ。一宇治郡山科小野：一葛野郡北山小野：一愛宕郡」とあるように三ヶ所存在する。はじめの山科小野は宇治郡であるので歎子とは関係ない。葛野郡の小野は③の北区小野で、清滝川の上流域、水谷川との合流点付近に位置する。中世においては小野山と称されることが多く、小野郷という記述も見られた。また、愛宕郡の小野は②の左京区の小野であり、比叡山の西北にあたる山間地帯で、都に近い山里であるこの地は、貴族の隠棲の場所としても知られる。中世には北小野と南小野とに分かれていて、修学院・高野から八瀬・大原にかけての地域が比定されている。高野から木行坂（狐坂ともいい、松ヶ崎北方に位置し、宝ヶ池・岩倉方面へ抜ける道の途中にある）に向かう道を小野畷と称することから、岩倉もその一部が郷域に含まれていた可能性があるという。<sup>7</sup>

では小野皇太后宮の旧跡である常寿院はどこにあったのだろうか。『雍州府志』四に、「在同處。淨土專念僧住之。小野后藤歎子塔存」という記述がある。「同處」とは、常寿院の前項目の、補陀落寺の場所を指している。先にも挙げたが、補陀落寺の場所は、「今在小野市原」と「小町寺」を指す。『山城名勝志』第十二も、「今市原村有『小堂』。世謂常壽院舊趾」と、市原にあったとしている。しかし、同書

の続きに、「此小堂稱「補陀洛寺」、是又可「虚説」とあり、市原村にあるという小堂とは、現在「小町寺」と称された寺と同じだといわれている。因みに、『雍州府志』四の、「小野后藤歡子塔存」とある石碑は、現在も「小町寺」に存在する（図三参照）。

これらの内容を踏まえると、現在、静海市市原町にある「小町寺」が小野皇太后宮の旧跡である常寿院があつた場所、静市静原町で発見された遺跡が補陀落寺であることになる。鞍馬通り經由で寂光院へ至る途中、小野皇太后宮の旧跡、次に補陀落寺に寄つたという道順は自然であるように思われる。補陀落寺は遺跡が発見されたため正確な位置が分かつているが、果たして常寿院は市原町にあつたと断定してよいのだろうか。

また他の地誌類には、小野皇太后宮の旧跡を市原町としないものもある。『都名所図会拾遺』巻三には、「小野橋」という記述の後の「『小野皇太后宮の舊跡』という見出しの箇所に、「此ほとりにありしとなり。舊跡詳ならず」とある。「小野橋」は、「異より乾にわたす橋」で、北のほうは花園長谷に至るという。北の橋詰を西に行くと、「小野暇」といわれる木行坂の北に出る。また『山州名跡志』巻之六にも、「小野橋」「小野暇」については、「今此邊ヲ小野橋、小野暇トイヒ、又石藏ニモ近シ」という記述があるが、小野皇太后宮の旧跡地を小野橋付近とする記述は『都名所図会拾遺』にしか見られない。先に挙げたように、市原町とする説のほうが一般的であるように思われる。

ここでもまた、角田文衛氏が興味深い見解を示されているので、説を援用したい。<sup>(8)</sup>角田氏によると、小野皇太后宮である歡子は、後から

入内した寛子が皇后に立てられたことを快しとせず、自らの年齢をも考え、歡子の実弟に当たる法印権大僧都・静覚が別当であつた長谷（京都市左京区岩倉長谷町）の解脱寺の近くの里坊に遷徙した。長谷は、愛宕郡小野郷の聚落のひとつであつた。治暦四（一〇六八）年、父教通が関白となり、一家が栄えるなか、歡子は後冷泉天皇の崩後いよいよ仏道に徹してゆく。そして承保元（一〇七四）年八月に出家された。同十二月、歡子は御所を捨てて寺となし、常寿院と名付けた上で、御願寺にされるよう白河天皇に奏請し勅許を得た。歡子の在世中、常寿院の別当は、解脱寺真如院の僧で歡子の縁者である法印権大僧都の静覚、ついで権少僧都の公円が勤めたものと推測された。更に氏は、常寿院領の諸荘の大部分は歡子の父教通より付与されたもので、一部分は外祖父公任から贈られたものであらうとされた。祖父公任は愛宕郡小野郷の長谷に山莊を所有し、出家した後の晩年をこの山莊で過ごした。そこで氏は、公任の山莊が長谷に存したこと、その山莊を孫の静覚に里坊として遺贈したと考えられた。これらのことから、「常寿院は皇太后の歡子の山莊であり、それは由来を糾せば公任の山莊に他ならぬ」と推察された。そして、公任の山莊は小野皇太后宮の旧跡に常寿院は、愛宕郡小野郷の長谷、つまり左京区岩倉長谷町にあつたと考えられたのである。

長谷町は、『山城名勝志』巻十二に、「諸社根元記云、天照太神天岩戸籠ましませし時、鶏を集て長鳴させて岩戸をあけし所を今長谷といふ」とあるように、天照大神が岩戸にこもつた所であるという伝承があつた。『出来齋京土産』巻之四には、「岩倉山より北のかたは。朗詠

谷として四條大納言公任卿、和漢朗詠集をほらばれし所といへり」と、公任の朗詠集撰集に因んだ地名がある。また同様の記述が『菟芸泥赴』第五にも見られる。これに拠れば、「長谷と岩倉の間」を朗詠谷といひ、また朗詠谷については、『都名所図会』巻六に、「大納言公任卿の幽居し給ふ舊跡なり。此所は長谷川を傍て、北のかたなる山中に入ること、五六町ばかり、これを過ぎて、解脱寺といふ舊地あり。今に礎石のこる。こゝに於て公任卿出家し給ふとぞ」とあり、また、「是より一町ばかり北に至れば、平地あり。彼卿此所に住み給ひ、和漢朗詠集を撰し給ひしとなり。又、御所谷ともいふ」とある(図四参照)。

これらのことから考えて、祖父公任が出家した解脱寺、そして晩年に住んだという、ゆかりの地である長谷こそが歎子が簞居した山荘、すなわち常寿院であると考えるのが自然であろう。

常寿院が廃絶した経緯について、角田氏は、御願寺として格式が高いうえに歎子の所有財産の寄進も多く、財政的に豊かであった常寿院だが、仁平二(一一五二)年に大僧正行玄が別当職に任ぜられて以降、代々青蓮院の門主が兼務することとなったが、それは所領目当てのこととて、常寿院は窮屈な財政を強いられていたものと考えられた。南北朝時代まで辛うじて存続したが、尊円法親王を最後として別当の名は確認出来ない。衰亡の原因は、荘園の横領、また堂舎の炎上があらうとされる。

『平家物語』『大原御幸』の道筋を再度確認すると、「鞍馬とほりの御幸なれば、彼清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の旧跡を観覧あつて」と鞍馬街道經由で補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡すなわち

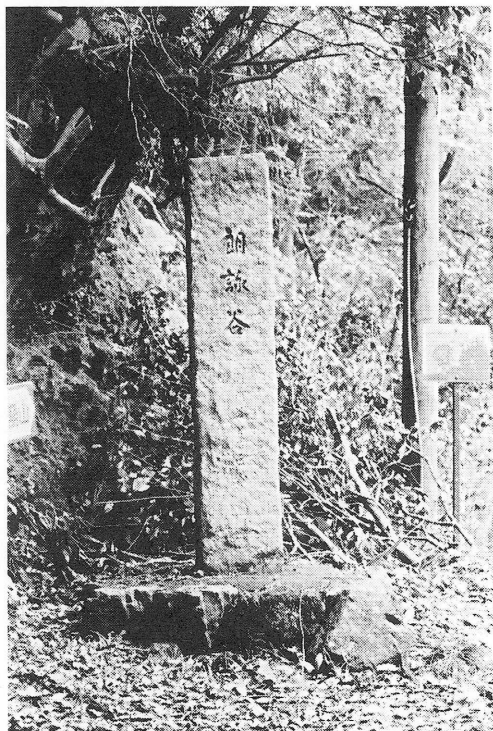
常寿院に寄つてから寂光院に至つたとしている。

「大原御幸」の本文から推定すると、補陀落寺に寄つてから寂光院へと至るまでの道のりに常寿院があつたと考えるのが自然である。しかし、これまで確認してきたように、常寿院のあつたと思われる場所は岩倉長谷町である。地図で確認すると、明らかに常寿院は「大原御幸」の道筋から外れた場所にある。これはどう解釈したらよいだろうか。

角田氏は、延慶本、四部合戦状本、長門本、源平盛衰記などの読み本系諸本に、補陀落寺に詣でた記述はあつても小野皇太后宮の旧跡である常寿院を訪ねたという記述は見られないことから、語り本系の『平家物語』の作者が加えた虚構であると考えられた。静原町、市原町ともに昔は小野郷に含まれていたため、安易に付け加えることが出来たのだらうとされた。そして、この作者は、「小野山荘が常寿院と名を変えてなお存続しているのを知らなかった」がために、道筋からは外れる常寿院を小野皇太后の旧跡として、御幸の際に立ち寄つたとされる場所となつたと考えられた。

また梶川氏は、寂光院までの道筋について、遺跡の正確な場所を考慮した上で、「京の都から直接、岩倉盆地を北行して小野皇太后宮舊跡へ、更に北方の山を越えて谷を渡り補陀落寺へ、そして翠黛山に続く北尾根越えは険しく困難であるため、一旦谷筋を南下して金毘羅山の南方にある江文峠を東へ越えて、大原へ至るルートの方が自然であるように思える」と考えられた。<sup>(9)</sup>しかし、梶川氏の説では、「鞍馬とほりの御幸」ではなくなる。少なくとも市原町までは鞍馬街道を經由し





図四 朗詠谷



図三 補陀落寺 (小野町)  
小野皇太后の旧跡地

なければ、「大原御幸」の本文と合致しない。更に、本文の内容から考えると、補陀落寺に寄った後に小野皇太后宮の旧跡に至ったという順序になる。「山州名跡志」巻之六の「普陀洛寺」の項目に『平家物語』「大原御幸」の本文を挙げ、その後に、「右ノ文ニ因レバ、小野皇太后ノ御所。靜原ニ近カリシト見ユ。其所今不詳。按ニ、普陀洛寺ヨリ大原ニ到ル、其中間ニ皇后ノ舊跡ヲ載タリ」とあるように、『平家物語』の文脈からは、補陀落寺に寄った後に小野皇太后宮の旧跡に行つたと解釈するほうが自然である。よって、梶川氏の説には疑問が残る。

このように、補陀落寺跡、小野皇太后宮の旧跡の位置を確認したが、本文理解のうえで注釈が適確であることは重要な要素である。注釈の内容は付注者によって異なるが、その項目で必ず記すべき事柄がある。今後、注釈はどのようにあるべきかを考えることが必要であると思われる。

### 三

『平家物語』覚一本「大原御幸」記事は読み本系諸本にも語り本系諸本にも共通してあらわれている。読み本系では、四部合戦状本（以下四部本）<sup>(10)</sup>、延慶本<sup>(11)</sup>、長門本<sup>(12)</sup>、源平盛衰記（以下盛衰記）<sup>(13)</sup>、語り本系では百二十句本<sup>(14)</sup>を挙げる。

ここで各諸本の寂光院への道筋を、本文を引用して確認、比較したい。

《四部本》

「補陀落寺へ御幸成るべし」と御披露有りて……清原深養父が補陀落寺を拝ませたまひつゝ、則て其れより小塩山の脚の山を超え、大原の奥、世料の里寂光院へ御幸成る

《延慶本》

法皇ハ「……清原深養父が建タリシ、補陀落寺ヲガマセ給ベシ」ト披露シテ、夜ヲ籠テ寂光院へ忍ノ御幸アリ。……彼寺ニ詣テ礼セ給フニ……其ヨリヲシヲノ山ヲ越テ、小原奥へ御幸ナル

《長門本》

大江山の麓を過させ給へば、清原深養父が心をとめて立置し、補陀落寺をかませ給ひつゝ、小鹽の山の麓、芹生の里、大原の別墅寂光院へぞ御幸なる

《盛衰記》

清原深養父が建てたりし補陀落寺を拝ませ給ひつゝ、女院の住ませ給ひける芹生の里、大原や小塩の山の麓なる寂光院へぞ御幸なる

《百二十句本》

大原ドヲリ日吉ノ御幸ト御披露有テ清原ノ深養父が造タリシ補陀落寺小野篁太后宮ノ旧跡、叡覧有テ……寂光院ハ……

道順を簡単に纏めると、

《四部本》

補陀落寺↓小塩の山の脚↓大原の奥、世料の里寂光院

《延慶本》

補陀落寺↓ヲシヲノ山↓寂光院

《長門本》

大江山の麓↓補陀落寺↓小鹽の山の麓、芹生の里、大原の別墅寂光院

《盛衰記》

補陀落寺↓芹生の里、大原や小塩の山の麓なる寂光院

《百二十句本》

補陀落寺↓小野ノ篁太后宮ノ旧跡↓寂光院

となっている。まず、気付かされるのは、全諸本共通して補陀落寺に御幸の際立ち寄っていること、小野皇太后の旧跡は語り本系のみに見られる記述であること、そして、四部本・延慶本・一方諸本は補陀落寺を御幸の名目としているのに対し、百二十句本（八坂系諸本も含む）は日吉参詣を名目としている。また、一方系諸本は鞍馬街道経由であるのに対し、百二十句本（八坂系諸本も含む）は大原街道経由である。今回は諸本を各々考察することはせず、今後の課題として、各諸本において後白河法皇が辿った道筋、小野皇太后宮の旧跡地訪問の有無の問題、「鞍馬とほり」での御幸であったか、等を挙げるに留めたい。

四

以上、諸本を簡単に比較したが、ここでは延慶本の内容に注目したい。延慶本は他の諸本が寺名を挙げるのみの記述であるのに対し、補陀落寺についての記述が非常に詳しい。次に、延慶本のその箇所の本文を示す。

彼寺ニ詣テ礼セ給フニ、御堂ノ麓、廻廊ノツヅキ、門内門外ノ有様、誠ニアラマホシキ風情也。本尊ヲ奉拝給ニ、阿弥陀ノ三尊ヨリ始テ、諸仏菩薩像光ヲ耀シ、仏壇仏前之飾リ差入セ給ヨリ、無何御心ヲ澄サセオワシマス。極楽浄土ノ莊嚴モカクヤト覺タリ。

後ノ大光ニハ九品曼陀羅ヲ奉書。一見一拜ノ輩ヲ罪業深重也トモ、  
弥随ノ悲願ニ答ヘテ、無始ノ罪障モ忽ニ消滅シテ、誰カ往生ヲ可  
不遂ト、タノモシクゾ御覽セラレケル。又淨リリノ有様ヲ書タル  
トオボシクニ、十二神將、七千夜叉神、其外天人聖衆等ノ影向シ  
タル景氣ヲ書タリ。衆病悉除、心身安樂ノ誓モタノモシク被思食  
ケル。左右局ノ聽聞所トオボシキ障子ニハ、或ハ四季ニ随、折ニ  
触タル無常觀念之様ヲ、筆ヲ尽シテ書タリ。誠ニ情モ深く、憂世  
ヲ可厭有様、被思食知ケリ。或ハ六道四生三途八難之苦患ノ様ヲ  
書タリ、延喜ノ聖主ノ地獄ニ墮サセ給テ、金峯山ノ日藏上人ニ向  
セ給テ、

イフナラクナラクノ底ニヲヌレバ刹利モ首陀モカワラザリケリ  
ト、炎ノ中ニシテ悲セ給ケムモカクヤト、哀ニゾ被思食ケル。是  
ニ付テモ、穢土ヲ厭ヒ、淨土ヲ願フセ給ベキ御心ノミゾ深カリケ  
ル。御堂ヲ出サセ給テ四方ヲ御覽ズルニ、後山ハ松杉緑ニ生シゲ  
リ、雲居ニ遊ブ群鶴モ、千年ノ契ヲ結テ、棲ヲトラムト覺タリ。  
庭別ニハ春霞ニ匂ヲ施ス楊梅、数ヲ尽シテ植並ブ。古巢ヲ出ル谷  
ノ鶯モ、百囀シテ木伝覽ト覺タリ。山ノ副ヘ水ノ流、閑居ノ地ヲ  
シメタリト見タリ。何事ニ付モ御心ヲ止ラレズト云事ナシ。其ヨ  
リヲシヲノ山ヲ越テ、小原奥ヘ御幸ナル

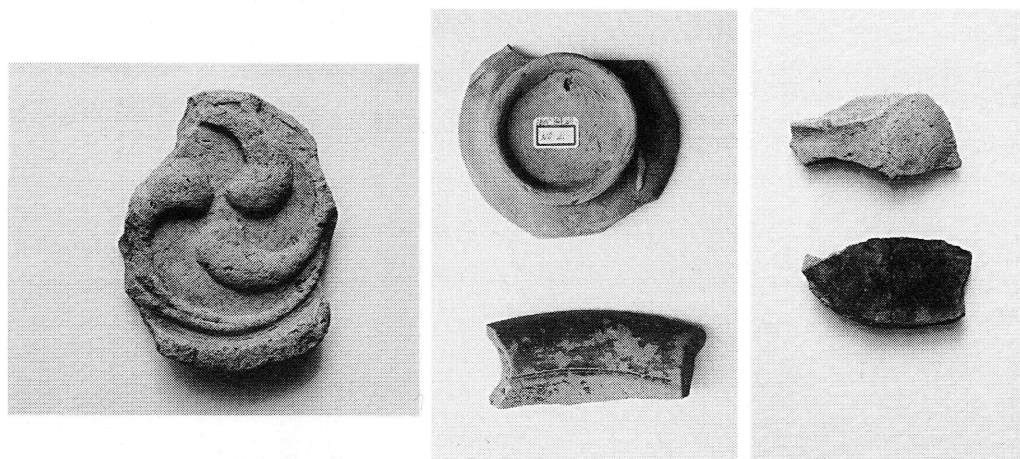
補陀落寺の内部には、本尊の阿弥陀三尊像をはじめ、諸仏菩薩像や  
仏壇仏前の飾り、九品曼陀羅、浄瑠璃浄土の様子、四季に随った無常  
觀念の様や六道四生三途八難の苦患の様を描いた障子等があり、また  
御堂の外の風景についてまで描写している。

延慶本「法皇小原へ御幸成事」に関しては、水原一氏の論文「延慶  
本平家物語の「賤」への眼差し」が詳しい。<sup>(15)</sup> 水原氏は、補陀落寺の由  
来をはじめ、補陀落寺の薬師信仰や延慶本における白山信仰等にも言  
及され、大変興味深い見解を示されている。

ところで『今昔物語集』巻十五「北山餌取法師往生語第二十七」に  
補陀落寺の由来に関する説話がある。簡単に内容を要約すると次の通  
りである。

比叡山西塔の延昌という人が修行中に大原へ行き、山中の一軒の家  
に泊まる。その家は餌取法師の家で、妻と共に馬牛の肉を食べていた。  
餌取法師は夜中になると沐浴し小庵に入り念仏を唱える。翌朝その理  
由を餌取法師に尋ねると、食べる物が無いので馬牛の肉を食べるとい  
う罪深い行いをしていること、自分が死ぬ時は延昌に告げるので死ん  
だ後にこの地に寺を建てて欲しいということを話す。その後、延昌の  
夢に餌取法師が現れ、西方極楽浄土に往生したと告げる。翌日に延昌  
は弟子を遣わせ、餌取法師が夜半に念仏往生したことを知り、その地  
に寺を建てて補陀落寺と名付けた。

水原氏は、この『今昔物語集』の補陀落寺由来譚を踏まえて、延慶  
本の補陀落寺の記述を考察されている。まず、餌取法師の念仏往生を、  
罪業深重の人物でも念仏によって罪が忽ち消滅せしめる「阿弥陀仏の  
悲願を實現させる」という補陀落寺の性格を指摘された。また補陀落  
寺に描かれていたという浄瑠璃浄土（薬師浄土）について、薬師如来  
の願を「一言で一括するならば、宿業卑賤の者への救いの仏力だと言  
える」とされ、餌取法師を実例として考え、補陀落寺本尊の阿弥陀如



図五 京都市埋蔵文化財調査センター蔵 補陀落寺跡表探遺物

来の他に浄瑠璃浄土の莊嚴を加えた記述も理に適ったものであるとされた。

先に見た通り、延慶本で補陀落寺の本尊は「阿弥陀ノ三尊」である。しかし、他の文献での補陀落寺の本尊は千手観音であったとされる。<sup>(16)</sup> それらの内容を引用し、『山州名跡志』や『山城名勝志』等の江戸期の地誌類も補陀落寺の本尊は千手観音であったとしており、阿弥陀三尊像を始め、その他内部の記述についても延慶本のみには確認出来ない。「補陀落」という観音の浄土を寺名にしている点からも、本尊は観音像であったと考えるのが自然である。しかし、本尊に関する内容が他と一致しなくとも、延慶本は補陀落寺内部を詳しく記している唯一の資料である。このことは、延慶本作者は実際に補陀落寺を見て知っていたわけではないとしても、補陀落寺に関する何らかの知識があったとは考えられないだろうか。補陀落寺跡表探遺物は、比較的多く見つかる須恵器や土師器を始め、内側が黒い、平安前期の黒色土器(図五・右)、奈良から平安中期の緑釉陶器(図五・中)、灰釉陶器、平安後期の巴紋の軒先瓦(図五・左)等、仏具から生活用品まで様々な遺物が採取された。いずれも平安時代のものに限られる。このことから、当時の補陀落寺の様子が窺えよう。本尊の問題も含め、寺内部の詳しい構造等は、これからの本格的な発掘調査に期待したい。

## 五

覚一本『平家物語』『大原御幸』で、途中立ち寄った補陀落寺、小野皇太后宮の旧跡の位置について確認したが、後白河法皇は一体どのような道筋で寂光院を訪れたのか。角田氏は諸本論の立場から小野皇太后宮の旧跡に立ち寄ったとする記述は虚構であるとされ、梶川氏は二つの位置関係から道筋を想定された。

では仮に補陀落寺に立ち寄った後、小野皇太后宮の旧跡を訪れたというように、本文通りの道順での解釈を試みる。『平家物語』の「鞍馬とほり」について『山城名跡志』巻之六に、「鞍馬通ト云フハ、鞍馬ヲ過テ往ニハアラズ。京師ヨリ鞍馬路ニカ、ツテ到ルヲ云フ也。路ノ體如<sub>二</sub>上云<sub>一</sub>、市原ヲ經テ、鞍馬エハ北ニ到リ、普陀洛寺エハ右ニ到ル也」とある。また『都名所図会拾遺』巻三に、「江文の社の西にあり此峠を越えて長谷岩倉に至る」という「静原峠」があり、江文から岩倉に至る道があったという。以上から、市原までは鞍馬街道を通り、そこから右に進み補陀落寺に向かう。そして江文經由で静原峠を通って小野皇太后宮の旧跡に行き、またもとの道で江文まで戻り、それから寂光院に至ったという道順も考えられる。しかし、途中の寄り道は、あくまで寂光院の建礼門院を訪ねる名目に過ぎず、道順から大幅にはずれた小野皇太后の旧跡にわざわざ行ったという記述は不自然であるように思える。小野皇太后の旧跡に行ったとする諸本は、先に比較した通り語り本系の諸本である。全諸本に見られる補陀落寺参詣の名目に加え、角田氏が言われる通り、語り本系作者が付した虚構であると

いう感を否めない。

本論は、「大原御幸」の道筋という一部の考察に重点を置いてきたが、考古学や歴史学等の他の視点を導入することで新しい事実が発見出来た。これらの位置は、灌頂卷の一節としては非書き直されるべきである。そして、今後は様々な分野にわたる広い視野からの研究が必要となる。このことは、これまで不明であった事項を明らかにする手掛かりともなり、更には、諸本論、灌頂卷成立論等、『平家物語』研究においての、根本的な問題の解決にも繋がっていくことが考えられるのである。

## 〔注〕

- (1) 二〇〇〇年五月九日に本堂が全焼した。梶川敏夫氏に窺ったお話によると、その後の考古学調査で、『平家物語』の成立時に書かれた寂光院は、現在私達が確認出来る寂光院であることが判明したとのことである。
- (2) 『平家物語』新日本古典文学全集（一九九四年・市古貞次・小学館）
- (3) 『角川日本地名大辞典 26京都市 上巻』（一九八二年・竹内理三・角川書店）
- (4) 近畿地図地名総覧（大阪人文出版センター）に加筆。
- (5) 『平家後抄―落日後の平家―』（一九七八年・角田文衛・朝日新聞社）第四章 女人の行方 大原御幸
- (6) 『平安時代史事典 本編上』（一九九四年・角田文衛監修・角川書店）「鞍馬と大原を結ぶ薬王坂のほぼ中央に位置したと推定されていたが近時、静原の集落の北北東約三<sub>キロ</sub>にある通称「クダラコージ山」の山中に

寺跡が確認された」とあり、梶川氏の論文も紹介されている。

- (7) 『日本歴史地名大系二七巻 京都市の地名』(一九七九年・下中邦彦・平凡社)

- (8) 『王朝の明暗』(一九七七年・角田文衛・東京堂出版) 小野皇太后と常寿院

- (9) 梶川敏夫氏「京都静原補陀落寺跡―平安時代創建の山岳寺院跡―」(一九九〇年三月・古代文化四二)

- (10) 『訓読四部合戦状本平家物語』(一九九五年・高山利弘・有精堂)

- (11) 『延慶本平家物語 本文篇下』(一九九〇年・北原保雄 小川栄一・勉誠出版)

- (12) 『平家物語長門本 全』(一九〇六年・黒川真道他・国書刊行会)

- (13) 『源平盛衰記』校註日本文學大系第十六巻(一九二六年・国民図書株式会社)

- (14) 『百二十句本平家物語』斯道文庫古典叢刊之二(一九七〇年・慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫編・汲古書院)

- (15) 水原一氏「延慶本平家物語の”賤”への眼差し」(一九九七年・『延慶本平家物語考証四』・新典社)

- (16) 『吾妻鏡』『拾芥抄』等、補陀落寺の本尊は千手観音であるとする。

# 〔付記〕

補陀落寺跡表採遺物(図五)について、京都市埋蔵文化財調査センター副所長の梶川敏夫氏に御教授賜りました。心より御礼申し上げます。

図二～五は黒田彰先生の撮影写真。

(すずい ちあき 文学研究科国文学専攻修士課程)

(指導：黒田 彰 教授)

二〇〇三年十月十五日受理